『紅樓夢』女性描寫における二つの世界

――晴雯の死の問題を中心にして――

船越達志

はじめに

『紅樓夢』第七十八回、賈寶玉のお氣に入りの侍女、晴雯が大觀園を追い出されたまま、實家で病のため他界する。そして現行の百二十回本において、彼女は死後、芙蓉の花を司る神となる。[1] 第百二回には、晴雯が芙蓉の花を司る神になったという噂が語られる場面が描かれ、さらに第百十六回には、仙界太虛幻境を訪れた賈寶玉が芙蓉の花を司る神をたずね求め、晴雯の顔をした仙女に出會うという場面が描かれている。しかし曹雪芹原作部分『紅樓夢』前八十回までの本文を仔細に考察すると、晴雯は必ずしも事實として死後花の神になったとは設定されていないふしがある。では晴雯の死は曹雪芹の原作において、どのように設定されているのか。本稿では、この問題を手がかりとして、『紅樓夢』敍述の構造を考察し、あわせて『紅樓夢』成立の過程に關して考えてみたい。

一　晴雯の死と芙蓉の神の問題

晴雯の死にまつわる一節は次のような經緯で描寫される。第七十八回、晴雯は大觀園を追い出されたまま病のため他界する。賈寶玉はその時ちょうど父賈政から呼び出されており、後になって小間使いの侍女から晴雯の事を聞く。その侍女は、自ら晴雯のもとへ見舞いに行って來たと言うのである。

小丫頭道「……他就笑道『你們還不知道。我不是死。如今天上少了一位花神、玉皇勅命我去司主。我如今在未正二刻到任司花。……』……」[2]

小間使いの侍女は「……あの人（晴雯）は笑って『おまえたちはわからないのよ。私は死ぬのではないの。今、天上でお一人花の神が缺けていて、玉皇さまが私にそれを主管するように勅命しましたの。私は今、正未二刻に着任し花を司るわ。……』と言いました。……」と言います。

そして、どういう花の神になったのかと尋ねる寶玉に對して、

（小丫頭）忙答道「……他就告訴我說、他就是專管這芙蓉花的。」

（小間使いの侍女は）あわてて「……あの人（晴雯）は私に、專らこの芙蓉の花を管理するのだと申しました。」と答えます。

と言う。そして賈寶玉は同回、晴雯の死を悼んで、「芙蓉女兒誄」なる題の長文の誄を作成し、晴雯の靈を祭る。晴雯を芙蓉の花を司る神とみなして作った誄である。續作部分第八十回以降における、晴雯が

死後芙蓉の花を司る神になる記述は、これらに基づくものである。

しかし、晴雯が芙蓉の花を司る神になるという事が事實として曹雪芹原作の『紅樓夢』に設定されているのかとなると、疑うべき點がある。

寶玉忙道「你不識字看書、所以不知道。這原是有的。不但花有一個神、一樣花一位神之外還有總花神。但他不知是作總花神去了、還是單管一樣的花神。」這丫頭聽了、一時譎不出來。恰好這是八月時節、園中池上芙蓉正開。這丫頭便見景生情、忙答道……

寶玉はあわてて「お前は字を知らず本を讀まないから知らないのだよ。こういう事はもともとあるのだ。花には神樣がいらっしゃり、一種類の花に、お一方の花の神がいらっしゃるほかに、さらに總花神という方がいらっしゃるのだ。しかしあの娘（晴雯）は總花神になりにいったのだろうか、それともただ一種類の花を管理する花の神になったのだろうか。」と言います。この小間使いの侍女は（寶玉の話を）聞くと、俄かにはでたらめが出てきませんでした。折りよく八月の時節で、園内の池のほとりにはちょうど芙蓉の花が咲いております。この小間使いの侍女は景色を見て臨機應變に思いつき、あわてて答えます……

晴雯が芙蓉の花を司る神になったという、この侍女の報告は、こういう寶玉とのやり取りの中でなされたものである。卽ちこの侍女は、寶玉の質問に對處すべく、園の池のほとりに咲く芙蓉を目にして臨機應變に作り話を話しているということになっているのである。つまりこの侍女は、實際に晴雯からいまわの際に、彼女が芙蓉の花を司る神になると聞いたわけではないのだ。こうなると、この一事のみならず、この侍女が晴雯のもとへ見舞いに行った話や晴雯が花を司る神として着任すると言ったというような報告そのものも全て疑わしくなる。そのような角度から改めてこの侍女と賈寶玉のやりとりをみると、この侍女の報告すべてが彼女の作り事として設定されている事を示唆する箇所が見えてくる。

他便帶了兩個小丫頭到一石後、也不怎麼樣、只問他二人道「自我去了、你襲人姐姐打發人瞧晴雯姐姐去了不曾。」這一個答道「打發宋媽媽去了。」寶玉道「回來說什麼。」小丫頭道「回來說晴雯姐姐直着頸子叫了一夜、今兒早起就閉了眼住了口、世事不知、也出不得一聲兒、只有倒氣的分兒了。」寶玉忙道「一夜叫的是誰。」小丫頭子說「一夜是叫娘。」寶玉拭淚道「還叫誰。」小丫頭子道「沒有聽見叫別人了。」寶玉道「你糊塗。想必沒有聽眞。」旁邊那一個小丫頭最伶悧、聽寶玉如此說、便上來說「眞個他糊塗。」又向寶玉道「不但我聽得眞切、我還親自偸着看去的。」

彼（寶玉）はそこで二人の小間使いの侍女を連れて一石の後側へと行き、別に何かするわけでもなく（小用をたすわけではなく）、ただ二人に「私が行ってから、襲人姉さんは晴雯姉さんを見舞いに人を行かせたかい。」と尋ねます。一人が「宋おばさんを行かせました。」と答えます。寶玉が「戻ってきたら何と言っていた。」と言うと、小間使いの侍女は「戻ってくると、晴雯姉さんは首を立てて、一晩じゅう人を呼んでいましたが、今日の朝は目を閉じ、口を閉じ、何もわからない狀態で、また一聲も出せず、ただ死ぬ間際の荒い息があるだけだったとのことです。」と言います。寶玉があわてて「一晩じゅう誰を呼んでいたのだい。」と言うと、小間使いの侍女は「一晩じゅうお母さんを呼んでいたとのことです。」と言います。寶玉は涙を拭って「それから誰を呼んでいたのだい。」と言うと、小間使いの侍女は「他の人を呼んでいたと

は聞いておりません。」と言います。寶玉は「お前はぼけているなあ。きっとはっきり聞かなかったのだろう。」と言います。傍らのもう一人の小間使いの侍女はとても賢く、寶玉がこのように言うのを聞くと、前に進み出て「本當にこの娘はぼけているわ。」と言い、また寶玉に向かって「私、はっきりと聞いたばかりでなく、自分自身でもこっそりお見舞いに行ってきました。」と言います。

こうして、この侍女は、晴雯が死ぬ間際に、寶玉のことをとても氣にかけていたという情況を話すとともに、晴雯が玉皇の勅命を受けて花を司る神になると言っていたという話をはじめるのである。ここで作者は、この侍女に「最伶俐（とても賢く）」の三字をわざわざ付している。この三字は、彼女が氣の利かないもう一人の侍女に代わって、寶玉の氣に入るように臨機應變の返事をしているという設定を示しているのではないだろうか。寶玉が執拗に晴雯の詳細を尋ねているのは、晴雯が寶玉のことを氣にかけて死んでいったとの報告を聞きたいからであることは明らかである。しかし應對している小間使いの侍女は融通がきかない。そこでこの賢い侍女は、寶玉の期待に沿うべく、自ら晴雯を見舞いに行き、晴雯が死ぬ間際に寶玉を氣にかけていたとの虚僞の報告をし、さらに寶玉を喜ばせようと、花の神になるという作り話をこしらえたという設定になっているのではないだろうか。前掲の、園に咲く芙蓉の景色を見て、臨機應變に晴雯が芙蓉の花を司る神になったとの作り話を寶玉に答える場面をあわせて考えれば、作者はそのようにこの一節を設定していると考える方が自然に思えてくる。つまりこの侍女の報告は最初から最後まですべて疑わしいのだ。そして前八十回内においては、晴雯が芙蓉の花を司る神になったらしき記述は、この他には存在しないのである。

このように、晴雯が死後、芙蓉の花を司る神になったという設定には、疑わしい點が多々ある。作者は意識的に、侍女のでたらめにすぎないとの合圖を讀者に送っているかの如くである。作者はいったい如何なる意圖でこの場面を描いているのか。讀者は晴雯の死をどのように認識したらよいのか。この點に關して、清代の洪秋蕃「紅樓夢抉隱」においては、侍女の作り事という形にはなっているものの、晴雯の靈が侍女の口を借りて述べたのだとの評が付されている。[3] 合山究氏も、「第七八回には、寶玉の侍女晴雯が結核で死んだのち、花神になるというくだりが見える」と述べる。[4] これらは、侍女の口からでまかせという形にはなっているものの、晴雯は死後やはり天界で花の神になったとする見解である。一方、太愚（王崑崙）氏は、賈寶玉の心理に着目して、賈寶玉は、晴雯の死という殘酷な現實に對して、超自然世界を想像し、そこに晴雯を位置付けるより他になすすべがなかったのだとする。[5] 太愚（王崑崙）氏は、晴雯が死後芙蓉の花を司る神になったというのは侍女の作り話を信じ込んでしまった寶玉の想像であり、事實として『紅樓夢』に設定されているものではないと位置付けているようである。卽ち從來晴雯の死の問題に關して、侍女の口からでまかせという形をとりつつも、晴雯は死後やはり天界で花の神になると設定されているのだとする見方と、それは賈寶玉の思いこみにすぎないものとして設定されているのだとする見方の二通りの解釋がなされているのである。作者曹雪芹の眞意は如何なるものであるのか。

二　女性描寫における二つの世界

この問題を考察するには、『紅樓夢』全體に目を向ける必要がある

と筆者は考える。まず晴雯の描かれ方について注目してみたい。

第五十二回には、晴雯が病氣であるにもかかわらず、夜通し賈寶玉のはおりを縫うという場面が描かれている。賈寶玉は賈母からもらった高級なはおりにうっかり燒け焦げを作ってしまうが、賈寶玉の侍女の中で、その焦げを繕える技術を持っているのは、晴雯一人だけなのであった。

（晴雯）挽了一挽頭髮、披了衣裳、只覺頭重身輕、滿眼金星亂迸、實實掌不住。待不做、又怕寶玉着急、少不得狠命咬牙捱着。……無奈頭暈眼黑、氣喘神虛、補不上三五針、便伏在枕上歇一會。……一時、只聽自鳴鐘已敲了四下、剛剛補完。……寶玉忙要了瞧瞧、說道「眞眞一樣了。」晴雯已嗽了幾陣、好容易補完了、說了一聲「補雖補了、到底不像。我也再不能了。」噯喲了一聲、便身不由主倒下了。

（晴雯は）髮の毛をちょっと束ねて、衣服をはおりますが、頭が重く身體が輕く感じられ、眼には火花が飛び散るかのようで、まことに耐えられません。（いっそ）やめてしまおうかとも思いますが、また寶玉を焦らせてしまうのではないかとも思われ、仕方なく懸命に齒をくいしばってがまんするしかありません。……いかんせん頭はくらくらして眼がぼうっとなり、息はぜいぜいとし精神も衰弱し、三五針も繕うと枕に伏せて一休みするのでした。……やがてぼんぼん時計が四つ打ったのが聞こえたときに、ようやく補修が終わりました。……寶玉は急ぎ（はおりを）見せてくれるようにと要求して、「本當に（燒け焦げを作る前と）同じだ。」と言います。晴雯は何度も咳こんで、ようやく補修を終えると、「補修はしましたが、結局（燒け焦げを作る前とは）似てないわね。でもわたしにはもうできないわ。」とひとこと言うと、「あれえっ」と聲をあげて、身體を支えきれずに倒れてしまいました。

晴雯は賈寶玉のために我が身を犧牲にして、失神寸前になるまで働く。主人思いの獻身的な形象と言えよう。こういった晴雯の形象からみれば、晴雯が賈寶玉のお氣に入りであるという設定は無理なく理解できる。晴雯の死に際する賈寶玉の悲しみには、賈寶玉の目には晴雯が常に肯定的な存在として映っていたことが示されている。

しかし作者は一方、賈寶玉の目には映らない所で、晴雯にこういった獻身的な形象とは別の側面をも設定している。第二十四回には次のような場面がある。賈寶玉が自分の部屋の侍女である林紅玉をはじめて目にするという場面である。

寶玉看了、便笑問道「你也是我這屋裏的人麼。」那丫頭道「是的。」寶玉道「既是這屋裏的、我怎麼不認得。」那丫頭聽說、便冷笑了一聲道「認不得也多。豈只我一個。從來我又不遞茶遞水、拿東拿西、眼見的事一點兒不作。那裏認得呢。」寶玉道「你爲什麼不作那眼見的事。」那丫頭道「這話我也難說。……」剛說到這句話、只見秋紋碧痕嘻嘻哈哈的說笑着進來。……忽見走出一個人來接水。二人看時、不是別人、原來是小紅。二人便都詫異、將水放下、忙進房來東瞧西望、竝沒個別人、只有寶玉、便心中大不自在。寶玉は（林紅玉を）見ると、笑って「おまえもこの私の部屋の侍女なのかい。」と聞きますので、その侍女（林紅玉）は「はい。」と答えます。寶玉は「私の部屋の侍女であるのに、私はどうして（おまえを）知らないのだろう。」と言います。その侍女は聞くと、ふっと冷笑して「（若さまが）知らない侍女はたくさんいますわ。私一人だけなものですか。今まで私はお茶や湯をさしあげ

たり、あれこれさしあげたりするような、眼につくような事は少しもしたことがございません。どうして（若さまが私を）知りましょうか。」と言いますので、寶玉は「おまえはどうして眼につくような事をしないのだい。」と言います。その侍女は「この話は、私は申し上げにくくございます。……」ちょうどここまで言うと、秋紋と碧痕がおほほと笑いながら入ってきます。……ふと見ると一人の人物が湯を受け取りにやってきます。二人（秋紋と碧痕）が見ると、他でもない、小紅（林紅玉）です。二人はともに奇異に思い、湯を置いて、あわてて部屋の中に入ってきょろきょろと見ますと、他には誰もおらず、ただ寶玉一人だけがいますので、心中大いに不愉快になるのでした。

この後林紅玉は、この秋紋と碧痕という二人の侍女に散々に嫌味を言われる。林紅玉が賈寶玉と二人きりでいた事が越權であるとみなされたのである。ここには、賈寶玉の部屋では、一部の侍女がその他の侍女たちをおさえつけ、賈寶玉の眼につくような仕事はそれらの侍女たちが獨占して行なっているという狀況が示されている。そして賈寶玉は侍女たちの間のこういった關係を全く知らない。賈寶玉の林紅玉への質問にはその設定がよく示されていよう。そして第二十六回、この林紅玉とやはり賈寶玉部屋の侍女である佳蕙が、怡紅院（賈寶玉の住居）に對する不滿を語るが、そこに次のような言葉がでてくる。

（佳蕙）「……這個地方難站。……可氣晴雯綺霰他們這幾個都算在上等裏去。仗着老子娘的臉面、衆人倒捧着他去。你說可氣不可氣。」

（佳蕙は）「……ここ（怡紅院）は住みづらいわ。……腹立たしいのは晴雯や綺霰のような連中もみな上流にみなされてしまったことなのよ。父母の顔を鼻にかけて、みんなはあれを持ち上げてしまうんだから。あなた頭にこないの。」

ここには、多くの侍女たちをおさえつけている侍女の中心人物が晴雯であり、しかも晴雯たちはその他の侍女たちに陰で恨まれているという設定が語られている。そして第二十七回には、實際に晴雯が高壓的な態度で林紅玉に對する場面も描かれている。こういった晴雯の一面は必ずしも稱贊に値する形象であるとはいえまい。注目すべきは、先にも述べたごとくこういった陰濕とも言える侍女たちの間の確執を、賈寶玉は全く知らないという設定になっていることだ。作者は賈寶玉の全く認知しえない空間において、晴雯の必ずしも稱贊に値しない側面を設定しているのである。

また第二十六回には、晴雯が賈寶玉の部屋を訪れた黛玉を誰であるか確かめもせずに追い返してしまうという場面が描かれている。

誰知晴雯和碧痕正拌了嘴、沒好氣。……忽聽又有人叫門、晴雯越發動了氣、也竝不問是誰、便說道「都睡下了。明兒再來罷。」……（林黛玉）因而又高聲說道「是我。還不開麼。」晴雯偏生還沒聽出來、便使性子說道「憑你是誰、二爺吩咐的、一概不許放人進來呢。」ところが晴雯は碧痕とちょうど口論しまして、面白くない氣分でした。……突然また誰かが戸を叩いて案内をこうのが聞こえましたので、晴雯はますます氣をむしゃくしゃさせて、全く誰であるかも聞かずに「みんな眠ってしまいました。明日またいらっしゃい。」と言います。……（林黛玉は）そこでまた聲をあげて「わたしよ。それでも開けないつもりなの。」と言います。あいにく晴雯は（黛玉の言葉を）聞き取らずに、かんしゃくをおこして「あなたが誰であろうと、二番め若さま（賈寶玉）の言い付けで、いっさい誰も中にいれてはならないのです。」と言うのでした。

晴雯は一人でかんしゃくをおこして、侍女としての仕事を怠り、黛玉を寶玉に取り次がない。これもまた稱贊に値する形象ではない。そしてこの場面にもまた賈寶玉はいないのだ。つまり賈寶玉は晴雯のこの怠慢とも言える行動を全く知らないのである。

また第五十二回には、晴雯が侍女の墜兒に折檻を加えるという場面が描かれている。墜兒が物を盗んだ事がその原因である。

墜兒只得前湊。晴雯便冷不防缺身一把將他的手抓住、向枕邊取了一丈青向他手上亂戳。口內罵道「要這爪子作什麼。拈不得針、拿不動線。只會偸嘴吃。眼皮子又淺、爪子又輕。打嘴現世的。不如戳爛了。」墜兒疼的亂哭亂喊。

墜兒はやむなく前に寄ります。すると晴雯は突然、身をかがめて彼女（墜兒）の手をぐいとひとつかみし、枕元から一丈青（かんざし）を取出し彼女の手にやたらに突き刺すのでした。口では、

「こんな手がなんになろうか。針も使えず、絲も操れない。摘み食いができるだけなんだからね。見識も淺い上に、手癖が惡い。恥知らずな手だ。目茶苦茶に突いてしまうにこしたことはない。」

と罵ります。墜兒は痛さでやたらに泣き喚くのでした。

非は確かに盗みをはたらいた墜兒にある。しかし執拗にかんざしで手を突き刺し、折檻を加えるこの晴雯の形象は、必ずしも稱贊に値するものとは言えまい。むしろ恐ろしいと言える。先に述べた、晴雯が怡紅院において他の侍女たちをおさえつけているという設定と一脈通じる場面である。そしてここにも賈寶玉は在席していない。賈寶玉は、晴雯のこの恐ろしい一面を目にしていないのだ。

つまり賈寶玉の目には、晴雯の良い面しか映っておらず、彼女の稱贊には値しない一面は全く映っていないのである。言葉を換えて言うなら、作者は、稱贊に値する晴雯の形象を賈寶玉の視點とともに描くと同時に、賈寶玉の視點の外側において、必ずしも稱贊には値しない晴雯の側面をも設定しているのだ。人物描寫における作者のこうした描き分けは、晴雯のみに關するものではない。他の女性の描寫にもこの手法は用いられているのである。

第六十一回、賈迎春つきの侍女、司棋は料理部屋の柳家の妻女に卵を注文する。ところが柳家の妻女は數が限られているからと言って斷る。それを聞いた司棋は、

（司棋）帶了小丫頭們走來、見了許多人正吃飯。見他來的勢頭不好、都忙起身陪笑讓坐。司棋便喝命小丫頭子動手「凡箱櫃所有的菜蔬、只管丟出來喂狗、大家賺不成。」小丫頭子們巴不得一聲、七手八脚搶上去、一頓亂翻亂擲的。……司棋連說帶罵、鬧了一回、方被衆人勸去。

（司棋は）小間使いの侍女たちを連れてやってくると、たくさんの人たちがちょうど食事をしていました。（人々は）司棋の勢いがものすごいのを見て、みなあわてて身を起こし愛想笑いをしながら席を讓ります。司棋は大聲でとりかかるよう命令し、「すべての箱や櫃の中の食物は、かまわず放り出してしまって犬の餌にしてしまいなさい。どのみち皆の口に入るものじゃないんだ。」（と言います。）小間使いの侍女たちはその一言を待っていたとばかりに、寄ってたかって爭って驅け寄り、一頻りやたらにひっくり返したり、投げたりします。……司棋は散々罵って、大騷ぎしてから、やっと人々に宥められるのでした。

という行動を取る。要求した卵を斷られたとはいえ、何人も侍女をひきつれて料理部屋に押しかけ、散々に荒らして惡態をついて歸ってい

くという司棋の行動は、作者が好意的に描いたものとは言えまい。しかし賈寶玉の目には、司棋のこういった面は全く映らない。

寶玉不禁也傷心含淚說道「我不知你作了什麼大事。晴雯也病了、如今你又去。都要去了、這卻怎麼的好。」

寶玉は思わず心を痛めて涙を浮かべながら「私はお前がどんな重大なことをしたのか知らない。晴雯も病氣になったし、今またお前も行ってしまう。みんな行ってしまう、これはいったいどうしたらよいのか。」と言います。

第七十七回、司棋が榮國府から追い出される時、賈寶玉はこのように言って、司棋に同情する。寶玉にとって司棋はあくまで同情すべき可憐な存在なのである。

また第七十九、八十回には、薛寶釵の兄、薛蟠が夏金桂という女性を娶り、彼女のわがまま放題な惡女ぶりに散々苦しめられるという場面が描かれる。[8]

那時金桂又吵鬧了數次。氣的薛姨媽母女惟有暗中垂淚怨命而已。……如此習慣成自然、反使金桂越發長了威風、薛蟠越發軟了氣骨。……（薛蟠）惟日夜悔恨不該娶這絞家星罷了、都是一時沒了主意。於是寧榮二宅之人、上上下下、無有不知、無有不歎者。

その時には金桂は又何度か大騒ぎをやらかしていました。腹をたてた薛姨媽母娘はただこっそりと涙を流して（こんな嫁がやってきた）運命を嘆く他ありません。……このような事がやがて日常化してしまい、却って金桂の方がますます威風を吹かせるようになり、薛蟠の方はますます氣骨がなくなっていきます。……（薛蟠は）ただ日夜こんな疫病神のような嫁は娶るんじゃなかったと後悔するばかりで、一時にはどうしようもありません。そこで寧國邸榮國邸二軒のうち上の者も下の者もこの事を知らないものはなくなってしまい、嘆かないものも一人もいないのでした。（第八十回）

しかし賈寶玉は夏金桂に對して、

（寶玉）亦曾過來見過金桂、舉止形容也不怪厲、一般是鮮花嫩柳、與衆姊妹不差上下的人。

（寶玉も）またやって來て金桂に會ったことがありましたが、立ち居振舞いもなりふりもおかしくも荒々しくもなく、同樣に鮮やかな花、やわらかな柳といった感じで、姉妹たちとも上下の差がない人物です。（第八十回）

と感じる。作者が極力、惡女的形象をあたえて描寫している夏金桂すらも、賈寶玉の目には惡女とは映らない。花や柳のような可憐な美女にすぎないのである。

以上見てきた如く、晴雯をはじめとする『紅樓夢』中の女性描寫において、作者は、賈寶玉の認識というフィルターを通した世界（以下「內側の世界」と稱する）とその外側の現實世界（以下「外側の世界」と稱する）との間で描き分けを行なっている（以下この手法を「女性描寫における描き分け」と稱する）。「內側の世界」では、若く美しい女性たちはみな非の打ち所が無い存在である。しかし「外側の世界」においてはそうとは限らない。人間には良い面も惡い面もある。美しい女性の中にも、惡い人間は存在する。これが現實である。『紅樓夢』は、「女性描寫における描き分け」によって、女性を贊美する一方、その一面のみでは割り切れない女性の側面を描くことに成功しているのである。

そして「內側の世界」（つまり賈寶玉の頭の中）においては更に、若

く美しい女性はただ單に非の打ち所がない存在であるのみならず、死後も存在しつづける神祕的な存在であるとの考えが設定されている。第三十九回、賈家を訪れた劉姥姥は、一同を喜ばせようと、あることと無いことさまざまな話をする。

那劉姥姥雖是個村野人、卻生來的有些見識、況且年紀老了、世情上經歷過的。見頭一個賈母高興、第二見這些哥兒姐兒們都愛聽、便沒了話也編出些話來講。因說道「……去年冬天、接連下了幾天雪、地下壓了三四尺深。我那日起的早、還沒出房門、只聽外頭柴草響。……」……劉姥姥笑道「……原來是一個十七八歲的極標致的一個小姑娘、梳着溜油光的頭、穿着大紅襖兒、白綾裙兒。」

かの劉姥姥は田舎の人ではありますが、もともといささか見識がありまして、その上、年をとり、世の中のことも經驗ずみです。第一に賈母が興じているのを見て、第二にこれらのお坊ちゃんお嬢さんが喜んで聞いているのを見ると、たとえ話がなくなってしまっても話を作り出して話すのでした。そこで「……去年の冬、何日も續いて雪が降り、地面に三、四尺の深さに積もりました。私はその日早く起きまして、まだ玄關を出ない時、外で柴の響くのが聞こえたのです。……」と言います。……劉姥姥は笑って「……實は十七、八才ほどの、つやつやの髪を結った、深紅色のあわせ、白い綾絹の裙をつけた、極めて美しいお嬢さんだったのでした。」と言います。

劉姥姥はとっさにでたらめな話をつくりあげ、みなに語って聞かそうとする。しかし、劉姥姥がここまで話すと、突然ぼや騒ぎが起きてこの話はここで途切れてしまう。だが一人賈寶玉は劉姥姥のこの作り話に興味を抱く。

背地裏寶玉足的拉了劉姥姥細問那女孩兒是誰。劉姥姥只得編了告訴他道「那原是我們莊北沿地埂子上有一個小祠堂裏供的。不是神佛。當先有個什麼老爺。」……劉姥姥道「這老爺沒有兒子、只有一位小姐、名叫茗玉。小姐知書識字、老爺太太愛如珍寶。可惜這茗玉小姐生到十七歲、一病死了。」寶玉聽了、跌足歎息、又問後來怎麼樣。劉姥姥道「因爲老爺太太思念不盡、便蓋了這祠堂、塑了這茗玉小姐的像、派了人燒香撥火。如今日久年深的、人也沒了、廟也爛了、那像就成了精。」寶玉忙道「不是成精。規矩這樣人是雖死不死的。」

寶玉はこっそりと劉姥姥を引っ張り、その女の子は誰だったのかと詳しく尋ねます。劉姥姥はやむなく（話を）でっちあげて寶玉に「それは、もともと私たちの村の北側の田畑のあぜにある小さなみたまやで祭っているものだったのです。神佛ではございません。以前、何とかいう名のだんな様がいらっしゃいました。」と言います。……劉姥姥は「このだんな様には息子がおりませず、ただお嬢様が一人いらっしゃるだけでした。名を茗玉さまと申します。お嬢様は教養や知識を身に付けておりまして、だんな様も奥様も珍しい寶物であるかの如くに愛してらっしゃいました。ところが惜しいかな、この茗玉お嬢様は十七才で、病氣になって死んでしまったのです。」と言います。寶玉は聞くと、地團太を踏んで嘆息し、またその後どうなったのかと尋ねます。劉姥姥は「だんな様も奥様も（娘を）思慕する氣持ちが盡きないために、このみたまやを建て、この茗玉お嬢様の像を作り、人を派遣して香をたき、ろうそくの火をつけさせていたのです。今では年月がたち、人もいなくなり、みたまやもぼろぼろになり、その像がお

化けになったのでした。」と言います。寶玉はあわてて「お化けじゃないよ。こういった人は死んでも死なないのが例なんだ。」と言います。

寶玉はすっかりこの劉姥姥の作り話を眞に受け、翌日寶玉付きの使用人、茗烟にみたまやを探しに行かせる。しかしこれは劉姥姥の作り話であるため、茗烟はみたまやなど見つけられるはずもなく、さんざんな苦勞をする。だが寶玉は最後まで劉姥姥のこの話を疑うことはしない。つまり、賈寶玉の頭の中では、この茗玉という少女の靈の話は、眞實のこととして認識されてしまったのである。その一方で作者は、これが劉姥姥の口からでまかせであることも再三强調している。翌日茗烟がみたまやを見つけられず苦勞するという後日談はその一端である。この場面で作者はやはり「內側の世界」と「外側の世界」との間で描き分けを行っている。茗玉という少女の靈は、「內側の世界」の中では事實なのである。その一方で、茗玉の話は劉姥姥の作り事であるという現實の世界が、「外側の世界」において設定されている。この場面には、「內側の世界」においては、若く美しい女性たちはみな非の打ち所が無い存在であると同時に、「こういった人は死んでも死なないのが例なんだ（規矩這樣人是雖死不死的）」という神祕的な存在であることが示されている。こういった幻想は、賈寶玉の、

「女兒是水作的骨肉、……我見了女兒、我便清爽、……」

「女性は水で出來た身體であり、……ぼくは女性を見ると爽快な氣分になる、……」（第二回）

や、

「凡山川日月之精秀、只鐘於女兒……」

「すべての山川日月のきれいな精氣は、ただ女性にのみあつまる……。」（第二十回）

という有名な言葉の根底にある、特殊な價値觀と軌を一にするものである。彼の認識の中では若く美しい女性たちは、非凡で神祕的な存在であり、死後も無になることはないのだ。こういった特殊な價値觀が基となって、「內側の世界」は構築されているのである。

このように考察して改めて晴雯の死について考えてみると、晴雯の死もやはり同樣の構想の一環であると言うことができよう。晴雯の死の場面は、茗玉の靈の場面と全く同じケースなのだ。晴雯が芙蓉の花を司る神になるというのは、「內側の世界」のみにおける事實として設定されているのである。「內側の世界」においては、晴雯はあくまで稱賛すべき非凡な存在であり、死んでも死なない（天界で神になる）存在なのだ。だが逆に言えば、「外側の世界」においては、花の神になるというような荒唐無稽な幻想とは無關係な、現實に死んでいった晴雯が設定されているという事でもある。故に作者は、晴雯が花の神になったと信じ込む賈寶玉を描く一方で、それは侍女のでたらめな作り事に過ぎないという合圖を殊更に讀者に送るような描き方をしていたのだ。茗玉の例において作者が、茗玉の靈が寶玉の頭の中では實在のものとして認識される事を描く一方、それが劉姥

〈圖〉

（作者の視點・「外側の世界」）
晴雯は現實に死んでいった

（賈寶玉の視點・「內側の世界」）
晴雯は芙蓉の神になった

すべての美しい女性は素晴らしい存在

美しい女性の中にも良くない點がある

姥の作り話にすぎないことを再三強調しているのと同じである。晴雯の死の問題は、第七十八回の一場面の問題ではなく、『紅樓夢』全體に設定されたこの「女性描寫における描き分け」と一環の設定なのだ。つまり晴雯が死後、芙蓉の花を司る神になるというのは、「內側の世界」においては事實であっても、「外側の世界」から見れば、賈寶玉がそのように思い込んでしまったにすぎないものとして設定されているのである。

以上に述べた構造を圖示すれば〈圖〉のようになる。『紅樓夢』中に設定されたこの「女性描寫における描き分け」とそれを構築する「內側の世界」と「外側の世界」という二つの世界は、作者の技巧的な設定であると言えよう。

三　『紅樓夢』における神仙世界

第二章で考察したごとく、晴雯が死後、芙蓉の花を司る神になったというのは、「內側の世界」という限られた世界の中のみでの設定であり、逆に「外側の世界」からみれば、この設定は、賈寶玉がそのように信じ込んでしまったにすぎないという設定でもある。しかしその一方、『紅樓夢』においては、「內側の世界」と「外側の世界」というような設定とは關係のないレベルで、登場人物たちが神仙世界から轉生したものだとの設定がなされている。

那僧笑道「……西方靈河岸上三生石畔有絳珠草一株。時有赤瑕宮神瑛侍者日以甘露灌溉、這絳珠草始得久延歲月。後來既受天地精華、復得雨露滋養、遂得脫卻草胎木質得換人形、僅修成個女體。終日遊於離恨天外、飢則食蜜青果爲膳、渴則飲灌愁海水爲湯。只因尙未酬報灌溉之德、故甚至五內便欝結着一段纏綿不盡之意。恰近日這神瑛侍者凡心偶熾、乘此昌明太平朝世、意欲下凡、造歷幻緣、已在警幻仙子案前掛了號。警幻亦曾問及灌溉之情未償、趁此倒可了結的。那絳珠仙子道『他是甘露之惠、我竝無水可還。他既下世爲人、我也去下世爲人、但把我一生所有的眼淚還他、也償還得過他了。』因此一事、就勾出多少風流寃家來、陪他們去了結此案。」

僧は笑って「……西方、靈河の岸の三生石のほとりに絳珠草が一株あった。時に赤瑕宮に神瑛侍者なる者がいて、毎日甘露を（絳珠草に）そそいでやったので、この絳珠草ははじめて長い歲月を得ることができた（命をのばすことができた）のさ。後に、天地の精華を受けていた上に、さらにまた雨露を得て榮養をつけたものだから、ついに草の骨組み木の體質から脫却して、人の形に變わり、女體のようになった。一日じゅう離恨天の外で遊び、飢えれば蜜青果を食べて食事とし、渴けば灌愁海の水を飲んでスープとしていた。ただ未だ（神瑛侍者が甘露を）そそいでくれた惠みに報いていないので、ついには五臟に纏綿として盡きない氣持ちが鬱積するまでになったんだ。ちょうど近ごろこの神瑛侍者がたまたま俗心を燃やし、この盛んで輝かしい太平の世に乘じ、下界に降り、人間世界を經驗しようと欲して、すでに警幻仙子のところで手續きをすませた。警幻（仙子）もまたかつて、（神瑛侍者が甘露を）そそいだ好意に（絳珠草が）未だ恩返しをしていない事を聞き及んでいたから、これに乘じて始末をつけたらよい（と絳珠草に勸めたのさ）。その絳珠仙子は『あの方（神瑛侍者）の甘露の惠みに對して、わたしは何の返す水もない。あの方が下界に降りて人となる以上、わたしも下界に降りて人となって、一生分の涙をあの方に返せば恩返しとできるでしょう。』と言うんだ

よ。この一事件によって、たくさんのすきものたちが、これらに付き添ってこの事件を始末しに（下界へ）行くことになったんだ。」と言います。（第一回）

僧の言う「神瑛侍者」は主人公賈寶玉に、「絳珠草」はヒロイン林黛玉になる。そして「たくさんのすきものたち（多少風流寃家）」は、二人を取り巻く大觀園の美女たちとなる（以下、伊藤漱平氏にしたがってこの設定を「還涙因緣譚」と略稱）[7]。さらにこれとは別個に、小説の語り手に關する神仙世界が存在している。その内容は概ね次の通りである。

女媧氏が天を修繕する際、使い餘された石が大荒山無稽崖青埂峯のふもとに捨てられた。ある日石は、僧侶と道士の話す俗世間の話題に興味を引かれ、僧侶と道士に俗世間へ連れてってくれるよう頼む。そこで僧侶は、「還涙因緣譚」の事件を機に、この石もその中に混ぜて俗世間に送りこむ。石は美玉となって賈寶玉の口に含まれ世に落ち、彼の人生を觀察する。後、石は見てきた經歴を石自らの上に書き記す。これが「石の物語」、つまり「石頭記」（卽ち『紅樓夢』）である（以下この設定を「石の神話」と略稱）。（第一回）

現行本『紅樓夢』には、登場人物らに關する「還涙因緣譚」と、傍觀者である語り手に關する「石の神話」という、二つの神仙世界が設定されているのである。これら二つの神仙世界は、卷開第一回に描寫され、『紅樓夢』の「楔子（まくら）」となっている。中國の白話長編小説において、こういった超現實世界を「楔子」として冒頭に設定する事は傳統的な手法である。『三國志平話』における登場人物たちの前身とその轉生という設定、『水滸傳』における伏魔殿から放たれた妖魔たちが豪傑たちに轉生するとの設定、『西遊記』における孫悟空が天界で暴れる場面、『儒林外史』における小星が文人たちに轉生するとの設定など、多くの白話長編小説の冒頭に、こういった超現實世界が「楔子」として設定されている。白話長編小説のスタイルと言ってよい[8]。「還涙因緣譚」と「石の神話」の設定は、このスタイルを踏襲したものであろう。

これらの設定は、一見、考察してきた晴雯の死に關する設定、卽ち彼女が死後天界で芙蓉の花を司る神になるという設定と似通っているが、果たして兩者に關係はあるのだろうか。もし同一の構想なら、「還涙因緣譚」が『紅樓夢』中の前提的な事實（「楔子」）として設定されている以上、晴雯が死後天界で花の神になるという設定も「内側の世界」のみに限るものではなく、『紅樓夢』全體の事實として設定されていることになり、第二章で述べた筆者の結論はなりたたないことになってしまう。

この問題を考える際、注目しうるのは次の場面である。

尤三姐從外而入、一手捧着鴛鴦劍、一手捧着一卷册子、向柳湘蓮泣道「……妾今奉警幻之命、前往太虛幻境修注案中所有一干情鬼。……。」……說畢、一陣香風、無踪無影去了。

尤三姐が外より入ってきまして、一手には鴛鴦劍をささげ、もう一手には一卷の册子をささげて、柳湘蓮に向かって泣きながら「……私はいま警幻（仙子）の命を承り、太虛幻境に赴き、案中のすべての情鬼を整理いたします。……」と言います。……言い終わると、一陣の香りのいい風を殘して、影も形もなく立ち去りました。（第六十六回）

第六十六回、柳湘蓮との愛情のもつれから自刎して果てた尤三姐は、死後柳湘蓮の夢に現れ、このように自らの死後の狀況を語る。尤三姐

が言う「警幻」とは、「還涙因緣譚」の警幻仙子のことであり、「太虛幻境」とは警幻仙子の統治する仙界である。これは明らかに「還涙因緣譚」の一端と言えよう。死にゆく女性が、神仙世界の主宰者の命に應じて、神仙世界に赴任するという設定は、まさに晴雯が死後芙蓉の花を司る神になるという場面設定に等しい。もし晴雯に關する設定が、これらの神仙世界と同一の構想なら、尤三姐の如く、「警幻」や「太虛幻境」など、この特殊な神仙世界の設定を示唆する言葉を言ってしかるべきである。しかし晴雯は、いまわの際に「警幻」と言わずに「玉皇」と言い、「太虛幻境」と言わずに「天界」と言ったことになっている。晴雯に關する構想は、これらの神仙世界の設定と關わらない全く別個の構想であると考えるべきであろう。續作部分である第百十六回においては、太虛幻境を訪れた賈寶玉が芙蓉の花を司る神をたずね求め、晴雯の顔をした仙女に出會うという場面が描かれるが、これは續作者が「還涙因緣譚」と晴雯に關する設定を同一の構想とみなした爲に生まれた場面である。しかし、曹雪芹の原作においては、尤三姐が「還涙因緣譚」の一端として、つまり『紅樓夢』の事實として死後太虛幻境の仙女となるのに對して、晴雯が死後、芙蓉の花を司る神になるというのは、「內側の世界」のみの事實、つまり「外側の世界」からみれば賈寶玉の思い込みとして設定されているのである。

四　『紅樓夢』成立過程との關係

では第二章で考察した「女性描寫における描き分け」は、『紅樓夢』成立過程のどの段階に構想された手法であるのか。

筆者は先に別稿において、『紅樓夢』甲戌本第一回に列擧された五つの異名（「石頭記」「情僧錄」「紅樓夢」「風月寶鑑」「金陵十二釵」）のうち、「石頭記」を除く四つの異名は元來獨立した別個の小說を意味しており、それら四部の小說を集大成したのが「石頭記」、卽ち現行本『紅樓夢』なのではないかとの假說を提示した。卽ち、「情僧錄（情僧の記錄）」は戀愛、「紅樓夢（紅きたかどのの夢）」は貴族生活とその崩壞による無常感、「風月寶鑑（色戀の鏡）」は戒淫、「金陵十二釵（金陵の十二美人）」は才能ある美しい女性たちを描く事をそれぞれ主題とした別個のミニ小說だったのではないかと考えたのである。それぞれの書名が想起させる內容と現行本『紅樓夢』に內在する主題が一致するからである。[9] この內、ミニ小說「金陵十二釵」に關しては、王熙鳳の形象を考察することを通して、以下のような見通しを立てた。

『紅樓夢』中において、王熙鳳の形象には、美しい容貌と大家族における機轉のきく有能な嫁という稱贊に値する形象が設定されている一方、機轉がききすぎる爲に姑邢夫人の不興をかい、嫁姑問題に惱むという苦惱が設定されている。この內、美しい容貌と大家族における有能な嫁という稱贊に値する形象は、元來のミニ小說「金陵十二釵」に由來するものであり、嫁姑問題に惱むという苦惱は各ミニ小說が集大成していく過程において新たに設定されたものと位置づけた。筆者は、元來のミニ小說「金陵十二釵」は女性の美貌と才能を稱贊をこめて描いた『列女傳』風の小說であったと考える。こういった小說においては、ただ單に女性の美貌と才能を描けばよいのであるから、彼女たちが生活の中に身をおいて描寫される必要はない。しかし、各ミニ小說が集大成すると、ストーリーも複雜になり、その女性たちも實生活の中に身を置いて描かれる必要がでてくる。作者はこの時、王熙鳳の形象に、そういった才能ある女性が苦惱する現實を設定するようになっていったのではないかと考えたのである。前者では、單なる女性

賛美に過ぎなかった描寫が、後者ではリアリティーを伴った描寫に昇華したのである。このリアリティーの追求こそが、各ミニ小説を集大成していく際の作者の動機だったのではないかと考えた。[19]

第二章で考察した、「女性描寫における描き分け」は、やはり同様に各小説が集大成する際の、リアリティーの追求という過程において設定されたものと思われる。元來の『列女傳』風のミニ小説「金陵十二釵」においては、女性は稱賛をこめて描かれれば事足りる。即ち、女性を賛美する賈寶玉の視點と作者の視點が同じであって良い。しかし現實はそれで割り切れるものではない。美しく才能ある女性たちにも必ずしも稱賛に値しない側面があるし、良くない女性もいる。作者は各ミニ小説を集大成する際、かつてのミニ小説「金陵十二釵」を描いた視點を主人公賈寶玉の視點という枠（「内側の世界」）に封じ込め、その外側にそれでは割り切れない現實の世界を描く視點（「外側の世界」）を設定したのではないか。これはまさしく、稱賛に値する王熙鳳の形象の反面に、彼女が現實に生きる苦悩を設定するという、作者のリアリティー追及の創作過程と同質の姿勢である。つまり筆者は、「内側の世界」は元來のミニ小説「金陵十二釵」の名殘であり、「外側の世界」は各小説が集大成する際の、リアリティーの追求という過程で設定されたものであると考えるのだ。

第三章で述べた『紅樓夢』における神仙世界、即ち「還涙因緣譚」と「石の神話」は、更にその後になってから、大部の小説となったこの小説の體裁を整える爲、先行する白話長編小説のスタイルを踏襲し、「楔子」として付け足されたものであると考える。前述の別稿では各小説を集大成した、最終段階の書名を「石頭記」と位置付けたが、その書名はまさに「石の神話」という神仙世界に由來するのである。

おわりに

本稿では、晴雯が芙蓉の花を司る神になったという設定が『紅樓夢』中においてどのように位置付けられているのかという問題から、『紅樓夢』には主人公賈寶玉の認識というフィルターを通した世界（「内側の世界」）と、その外側の現實世界（「外側の世界」）という二つの世界を通して、「女性描寫における描き分け」がなされていることを指摘した。前者の「内側の世界」においては、女性は無條件に稱賛に値する存在であり、後者の「外側の世界」においては必ずしもそうではない。晴雯は「内側の世界」の中のみの事實として、死後芙蓉の花を司る神として天界に赴いたと設定されているのである。そしてこの二つの世界をもとになされている「女性描寫における描き分け」は、『紅樓夢』成立の過程においては比較的晩期に設定された手法であると考えた。筆者は、現行本『紅樓夢』は複數のミニ小説（「情僧錄」「紅樓夢」「金陵十二釵」「風月寶鑑」）を集大成したものだとの假説を抱いているが、このうちミニ小説「金陵十二釵」は、才能ある美しい女性たちを描く事を主題とした小説であったと考えている。このミニ小説「金陵十二釵」においては無條件に女性が稱賛をこめて描かれていたが、各ミニ小説を集大成する過程において、作者はリアリティーを追及しはじめ、「女性描寫における描き分け」によって、女性たちのそれのみでは割り切れない側面をも描くようになったと考えたのである。つまり「内側の世界」は元來のミニ小説「金陵十二釵」の名殘であり、「外側の世界」は後に設定されたものと考えるのである。

注

(1) 伊藤漱平『『紅樓夢』に於ける象徴としての芙蓉と蓮と―林黛玉、晴雯並びに香菱の場合―』（一九九八、『日本中國學會創立五十年記念論文集』汲古書院）によれば、ここでいう芙蓉とは木芙蓉のことであると言う。

(2) 兪平伯校訂『紅樓夢八十回校本』（一九七四、中華書局香港分局）を使用。

(3) 馮其庸纂校訂定『八家評批紅樓夢』（一九九一、北京文化藝術出版社）所收のものを參照。

(4) 合山究『「紅樓夢」新論』第一章『『紅樓夢』と花』（一九九七、汲古書院）參照。

(5) 太愚「晴雯之死」（一九四九、太愚『紅樓夢人物論』國際文化服務社所收）參照。

(6) 夏金桂の形象に關しては、拙稿「夏金桂と賈迎春―『紅樓夢』成書の過程からみた一側面―」（一九九五、『集刊東洋學』七四）參照。

(7) 伊藤漱平譯『紅樓夢』解説（一九九六、平凡社ライブラリー『紅樓夢』第一巻）參照。

(8) 李田意「論《紅樓夢》裏的超現實世界」（一九九五、『紅樓夢學刊』一九九五―一）、李希凡「〝神話〟和〝現實〟」（一九九六、李希凡『紅樓夢藝術世界』文化藝術出版社所收）、劉相雨「論《紅樓夢》的楔子」（一九九九、『紅樓夢學刊』一九九九―一）參照。

(9) 拙稿『『紅樓夢』形成に關する試論―「風月寶鑑」を中心にして―』（一九九五、『中國―社會と文化』一〇）、「夏金桂と賈迎春―『紅樓夢』成書の過程からみた一側面―」（注6前掲）、「紅樓夢戀愛譚考」（一九九六、『日本中國學會報』四八）、『紅樓夢』貴族生活崩壞譚の展開―梨香院の女伶描寫を中心にして―」（一九九七、藤原尚教授廣島大學定年祝賀記念『中國學論集』溪水社）、「《紅樓夢》成書試論」（一九九七、『紅樓』一九九七―一）、「《石頭記》脂硯齋評語淺探―以署名棠村和梅溪的批語爲中心」（一九九七、'97北京國際紅樓夢研討會」提出論文）、『『紅樓夢』成立問題研究史』（一九九八、『中國學研究論集』創刊號）、「薛寶琴論」（一九九八、『中國學研究論集』第二號）、「王熙鳳の形象」（一九九九、『岡村貞雄博士古稀記念中國學論集』白帝社）參照。

(10) （注9）前掲拙稿「王熙鳳の形象」參照。この事は王熙鳳以外の女性たちの形象にも伺える。王熙鳳以外の女性たちに關しては、稿を改めて考察したい。